

平安京左京六条二坊八町跡、烏丸綾小路遺跡

地元向け現地説明会資料

令和8年1月17日

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

所在 地：下京区猪熊通五条下る柿本町 690 ほか

調査原因：下京税務署建設事業

調査期間：令和7年9月17日～令和8年2月27日（予定）

調査面積：511m²（1区：119m²、2区：392m²）

1. 調査地の概要

調査地は「平安京左京六条二坊八町跡」「烏丸綾小路遺跡」に該当します。烏丸綾小路遺跡は、弥生時代前期から古墳時代後期頃の集落遺跡です。また延暦13年（794）に平安京遷都とともに、調査地周辺は平安京に取り込まれ、左京六条二坊八町の東側中央部に位置します。文献史料によると、左京六条二坊には、六条殿、藤原經忠第、堀川館、六条殿（後白河法皇御所）など、上皇や貴族の大規模な邸宅が存在していたことが文献などから知られているものの、その様相は不明です。平安時代後期から鎌倉時代にかけては、史料や近隣の発掘調査成果から、活発な土地利用が行われていたことがわかり、左京を中心とした町の形成が進んでいきます。

このような場所に、法華宗の三大寺院の一つである本圀寺が貞和元年（1345）、光明天皇の勅により、寺地を賜り、鎌倉から移転してきました。これが京都での本圀寺の始まりとされています。本圀寺の寺伝によれば、日蓮が建長5年（1253）に鎌倉に草庵を建て法華堂と号したことにして、弘長3年（1263）には伊東で得た仏を本尊とし、大光山本国寺と号するようになり、日蓮の死後も鎌倉幕府や天皇の勅願所とされていたお寺です。京都での寺地については、東は堀川小路、北は五条大路、西は大宮大路、南は七条大路の12町もの広大な範囲であったと考えられます。その後、応仁・文明の乱（1467～1477）で京内は荒れ、室町幕府の権力が弱まるものの、日蓮宗の信者が増加し、町衆の間で勢力を拡大していくようになります。その後も時の権力者の保護を受けつつ、寺力を保ちます。大永7年（1527）には細川晴元との戦いのために、將軍足利義晴が本国寺に陣所をおき、『二水記』によれば天文元年（1532）には「用（要）害」が築かれていたことが記されるなど、法華宗の勢力拡大を抑えようと敵対するものからの攻撃に備えるため、寺域は要塞化していたものと考えられます。また『阿刀家文書』の天文5年（1536）条にも、「・・・洛内九重条里小路に寺構と号し、窓に堀を堀り、上意の沙汰を受けず・・・」と記され、周囲に堀がめぐらされていたことがわかります。そのような中、比叡山延暦寺を中心とする天台宗と六角氏などの連合軍が法華宗二十一本山を焼き討ちする天文法華の乱（1536）が起き、京内の法華宗の施設はことごとく焼け落ちましたが、唯一持ちこたえたのが本国寺であったといわれています。この乱の影響は大きく、下京はほぼ全焼、上京も1/3が焼失し、その被害は応仁文明の乱を凌ぐともいわれるほどの戦火だったようです。永禄11年（1568）には織田信長が足利義昭の上洛に際し、本国寺に陣が置かれていましたが、永禄12年（1569）に信長の帰國の間際をぬって、三好三人衆の攻撃受け、焼失したとの記録が残っています。天正10年（1582）には豊臣秀吉は本国寺を拠点に本能寺の変の事後処理を行い、天正19年（1591）には京都改造の一

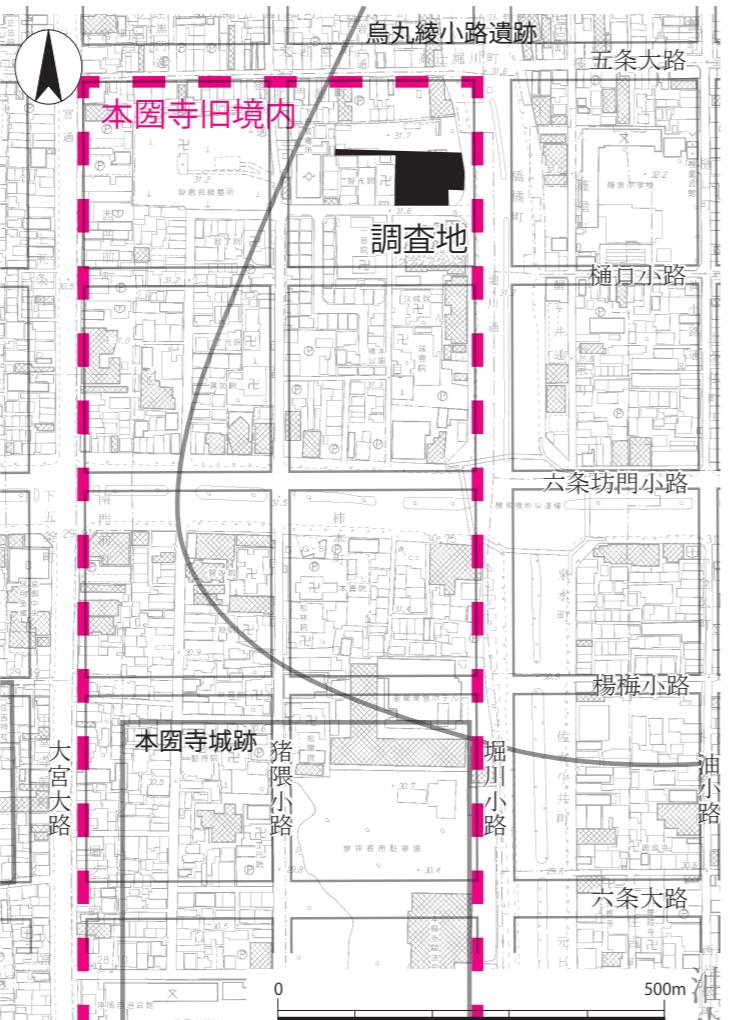


図1 調査地位置図（1:10,000）

つとして、本国寺の寺領の南2町を本願寺に割譲させたとされています。長い歴史の中で、天文法華の乱や天明の大火灾など幾度もの火災や災害などからの復旧する中で、堂舎や頭塔などの規模や配置は度々変化したものと想定できます。江戸時代末期に描かれた『本国寺惣境内之図』では、寺領の南東武に本堂や祖師堂、東側に壇林、西側や北側には塔頭や門前家などが見て取れます。この絵図上で調査地は、北東に描かれた東総門及び一音院と描かれた区画付近にあたります。なお一音院は、慶長5年（1600）に三好吉房（秀吉の姉の夫）より創建された寺です。明治政府のもと、明治4年（1871）11月、本圓寺境内の道路が上地され、明治7年（1874）には旧本圓寺境内は、柿本町と称されるようになります。明治15年（1882）には西本願寺と本圓寺の間に新たな道路が開かれ、明治29年（1896）には堀川警察署がこの地に新築移転され、これに伴い一音院は現在の場所に移転しました。本圓寺自体は、昭和46年（1971）に山科区御陵大岩に移転したものの、今も町内には当時の区画の名残や本圓寺の塔頭だった寺が数多く残っています。

2. 調査成果について

今回の調査では、弥生時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代の遺跡を想定し、工程上、2地区に分けて調査を行いました。東側を1区、西側を2区と呼んでいます。そして、これまでの調査で、室町時代から江戸時代にかけての本圓寺に関わる溝や井戸、土坑のほか、鎌倉時代の井戸や土坑、柱穴などを確認しました。

江戸時代（本圓寺境内：一音院跡）

1区で大規模な江戸時代の整地土、2区の南側部分で4基の土坑墓などを確認しました。特に確認した4基の土坑墓のうち1基は陶器の甕に埋納されていました。頭蓋骨や大腿骨、歯などの残りやすい部分は確認できます。骨の状況から4基とも、成人と考えられますが、性別や年齢、時代など詳しいことは、今後調べる必要があります。ただ、骨と一緒に出土している土器の年代から江戸時代と考えられます。またこれら土坑の近くには、延宝8年（1680）と貞享4年（1687）の銘のある墓石も確認できます。これらは敷地の一角に設けられる、いわゆる「屋敷墓」に伴うものと考えられます。

室町時代（本圓寺境内）

2区で土坑や石組みの井戸、1・2区で東西方向の溝などを確認しました。特に2区の中央部で円形の石組み井戸の石組み部分は直径1.5mで、人頭大や拳大の河原石を積み上げてつくっています。石を積む途中で、石を安定させるために必要な大きさに石を割ったり、瓦片を隙間に補填しているなどの様子がうかがえます。

また東西方向の溝を1・2区ともに確認しました。少しいびつですが、平面上、同じ溝と考えられます。2区では、部分的にしか残ってはいませんでしたが、一番残りの良いところで、溝の規模は、幅1.5m、深さ1.2mで、総延長は5.5mとなります。

鎌倉時代（本圓寺移転前：平安京跡）

2区で土坑や底に甕を据えた井戸、柱穴などを確認しました。特に2区北壁沿い中央付近で一辺1.5mの隅丸方形の土坑は、深さ1.6m付近以下に須恵器の大甕が据えられており、井戸と考えられます。

平安時代・弥生時代については、今後、調査を進めていく中で明らかになって行きますが、現状、弥生時代の自然河川の一部を確認しています。

3. まとめ

今回の調査では、室町時代から江戸時代にかけての本圓寺に関わる溝や井戸、土坑、整地土のほか、鎌倉時代の井戸や土坑、柱穴などを確認し、当時使用されていた土器や屋根に葺かれていたであろう瓦などが多量に出土しました。本圓寺は貞和元年（1345）に鎌倉から移転して以来、昭和46年（1971）に山科に移転するまでの約630年もの間、この地でその歴史を刻んでいた寺院ですが、寺院規模を勘案すると調査事例は少なく、その様相は不明な点が多いです。このため、この調査は本圓寺北東部の様子を具体的に知ることができる貴重な調査事例となるといえます。また確認した東西方向の溝は、本圓寺が最も防備に力を入れていた時期のものと考えられることから、寺域内の区画もしくは一時の本圓寺の北限を示す遺構として重要な遺構であると推測できます。



2区 土器が多量に詰まった土坑の断面（東から）



2区 東西方向溝（南西から）



2区 石組み井戸（南西から）



2区 土坑墓（北から）



2区 底に甕が据えられた井戸（北西から）



2区 底に据えられた甕（北から）



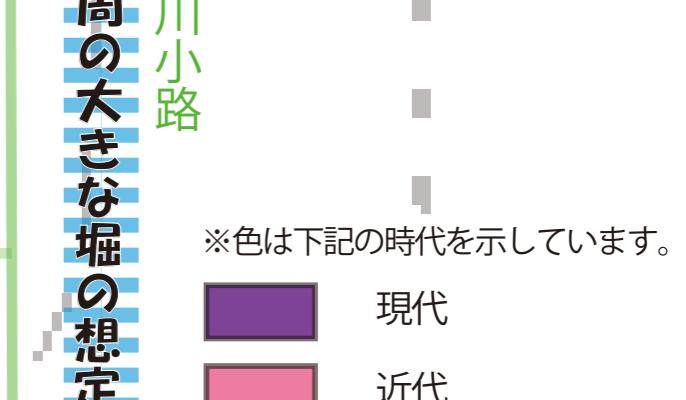
1区 全景（北西から）



1区 全景（上から）



1区 東西方向溝（北西から）



※色は下記の時代を示しています。

■	現代
■	近代
■	江戸時代
■	室町時代
■	鎌倉時代
■	平安時代

東総門想定位置

図2 調査区平面図及び各遺構写真

0 (1 : 250) 10m